一枚の銀杏の葉

河上知子
広島県・四五・主婦

久しく御無沙汰しております。

お元気でいらっしゃるのでしょうか。

買い物の帰り道、黄色く熟れた銀杏の葉っぱを拾いました。公園の片隅に、二メートルほどの背丈をした銀杏の木があります。細い幹にはたくさんの葉をとどめ、黄金色に彩られておりました。何枚かが地面にこぼれ落ち、その中の一葉を持ち帰ったのです。

黄色く色づいた銀杏の葉を眺めていると、あの日のことが、鮮やかによみがえって参ります。

あの日。そう、机の間を回っておられた先生が、私の背後で立ち止まりました。こんなこと、すっかりお忘れでしょうね。突然、目の前に、がっちりとした先生の大きな手が現れてきたのです。先生は、教科書の上に置いた銀杏の葉をつまみ上げられました。

この時期、私たちは校門の石畳に落ちた銀杏の葉を踏みしめて登校していました。一枚拾って、数学の教科書へ挟み込んでおいたのです。

先生は葉の付け根を持って、よじるようにくるくる回していらっしゃいましたね。鉛筆を握ったまま動かせなくなった私の手のそばに、そっと戻して、何もなかったかのように、机の間を行ってしまわれた。先生の背中を目で追いながら、私の心臓は大きな音をたて、からだの中を響き渡っていたのです。

その日は、教壇に立った先生の目を見ることはできませんでした。

あれから二十数年の年月が流れたというのに、先生の手でくるくる回されたあの時の心が、そっくり舞い戻ってきました。

今なら、笑い話として、先生に気持ちを伝えられると思い、筆をとりました。

ご健康を、心よりお祈り申し上げます。